
窓辺

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓辺

【Nコード】

N8741H

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

夕暮れ時に窓辺で読書をする彼女を、僕は何時から知っているのだろう……次第に解き明かされる隣の窓辺に佇む彼女の姿と、僕自身。

【巻話】（前書き）

私の作品の中では、かなり短い方だと思います。
全3話の予定です。

【巻話】

僕が彼女を見かけるようになったのは、何時頃からだろう。

ずいぶん前から見ているような気もするけれど、二ヶ月前にこの地へ引っ越して来たのだから、まだそんなに日は経っていないと思う。

その記憶には自信が無い。

最近の記憶は尽く実体感に欠け、時間の経過が曖昧なのだ。

子供によくあるという、記憶の欠落かもしれない。

僕の部屋は南東向きに位置しているから、ベランダのある南側の大きな窓の他に、東側には立体的に突き出た明り取りの窓がある。

突き出た左右の狭い部分は外開きになり、真ん中の部分は洋風窓で下半分が上にスライドする。

夕暮れ時、彼女は窓辺で本を読む。

僕に気付くと少しはにかんでニコリと笑みを見せる。

この辺りはまだ宅地開発されてから数年しか経っていないらしく、今でも空き地が多い。

道路は整備されて暮盤の目に配置され、二ブロック後ろには大きな薬局型スーパーもある。

見通しの良い路地を挟んだ目の前と、すぐ後ろは世帯用のアパートが在って、右隣、つまり西側のお隣は去年新築した家が建つ。

東側は路地を挟んですぐ、彼女の家が建つ。

埼玉県の小手指から先月引っ越して来た僕は、転校したばかりの学校から帰ると新興住宅地のここで暇を持て余していた。

東北の地方都市はもっと栄えていると思っていただけで、中心地から外れるとあまり賑やかではない。

ゲーセンもないし、ビルひとつ建っていない蒼穹そらはやたら広い。ビックリしたのがテレビだ。

チャンネルが少ない。

今月スカパーを入れてもらう予定だけれど、実の所父さんだってテレビのチャンネル数の少なさには驚いていた。

南側のベランダから景色を眺める。

国道の向こうの土手に小さな人影が見える。

運河があつて、土手の上は散歩道になっているのだ。

運河の向こうには大学が在るらしいけれど、ここからは低い山の連なりが見えるだけだ。

山の在る景色なんて、遠足の時くらいしか見た事が無かったけれど、今はそれが日常の風景になっている。

今はまだ、あの窓に彼女の姿はない。

僕はベランダの手すりに腕を絡めて、田舎チックで整備された住宅地から、外の風景を見渡し、遠く道行く人などを観察する。

ひゅうつと何かが空中を横切った。

ツバメだ。

ベランダの下にツバメが巣を作ったらしくて、辺りを忙しく飛び回る。

「そうなの……それはそれは……」

「そうなんですよ……」

下から母さんの声が聞こえた。

夕飯の買い物の帰りだろう。家の前で誰かと別れ、その誰かは家の前を通って歩いてゆく。

僕の存在に気付いたのか、上を向いて僕と目が会つと小さな笑みをくれた。

誰だか判らないそのおばさんに、僕は小さな会釈を返す。

おばさんの笑みが、何だか僕を少し哀れんでいるようなわざとらしい笑みに見えたのは気のせいだろうか。

おばさんは片手に大きなエコバックを下げたまま、アパートの角に姿を消した。

僕はベランダの端から、彼女の家を覗きこむ。

ひと気は無いように感じる。

だれもいないのだろうか？

それでも夕暮れ時には、あの窓辺に彼女は座って読書をしている。もしかして彼女は何処か身体が悪いのかもしれない。

小学五年の僕とそう変わらないように見えるけれど、先月から僕が通っている小学校に彼女の姿は無い……と思う。

朝の朝礼の時に、4年生や6年生の女子を眺めてみても、未だにその姿は無い。

しかし、もしかしたら彼女は中学生なのかもしれない。少し幼く見えるから、僕が勝手に同年代と思っているのかもしれない。

向こうから見たら僕は大分子児に見えるから、笑顔を送り、時折手を振って僕をかまってくれるのかもしれないのだ。

陽射しが大分傾いて、家並みの影を延ばし始めている。

僕の家影が伸びて彼女の家にかかり、次第にその陰は彼女の部屋窓にかかる。

窓に西陽が映り、それが少しずつ動いてやがて消える頃、気がつくとな彼女は窓辺にいる。

僕はその時間、少しだけソワソワする。

でも、彼女が窓辺に現れるのをじっと見ていたりしたら、ちょっと変だと思われそう、その時間適当なマンガを取り出しては頭に入らない活字を追いかける。

彼女はもしかしたら車椅子なんかに乗っているのだろうか。などと考える事も在る。

ひっそりと暮らしているのかもしれない。

朝、時折彼女の部屋を覗く。

ガラスの映りこみで中はよく見えないけれど、喧騒は感じられない。

中学だったら、やっぱり登校時間が違うのか……などと思ったりもする。

部屋に入る陽光は次第に弱くなって、片隅に暗がりを作る。
西側の窓から、彼女の部屋を見る。

彼女が窓辺に座って、本を読んでいる。

毎日ではない。

彼女と逢えるのは一週間に数回だ。月曜だったり、水曜だったり、土曜日だったり。

つまり、決まった曜日ではなく、まったくランダムに彼女は窓辺に現れる。

それ以外は部屋にいないのかもしれない。

これももしかしたらだけど、入院とかしていて、たまに自分の部屋に帰って来るのかも……。

窓から覗く僕に気付いた彼女は、笑顔で小さく手をふる。

話しをしたい欲求にかられる。

でも、会話を交わすには、路地を跨いだ距離がちよつと遠く感じる。

僕は手を振らずにだまって小さな会釈をして、そして笑みを返す。

彼女は手を下ろすとまた、手元の本に視線を落とした。

彼女の行動をずっと見ていたい気持ちも在るのだけれど、そんな変質者みたいな事も出来ずに僕は一度窓から離れる。

再び、そつと部屋を見る。

彼女はふと顔を上げると僕に視線を向け、また手を振った。

今度は僕も手を振ってみる。

彼女はじつと僕を見つめる。

どれくらい見ていただろうか。

僕も彼女を見ていた。

彼女の笑顔は、よく見ると少し哀しそうだ。

彼女はやつぱり、不幸を背負っているのだろうか。だから、笑顔が少し愁いなのかもしれない。

【武話】

僕が育ったのは埼玉県の小手指駅にほど近い、行政道路沿いの住宅地だ。

正確には浦和所沢線と呼ばれるこの道路は、夕方何時も渋滞して走っているうちに必ず陽が暮れるので地元では「夕暮れ道路」とも呼ばれていた。

大きな古書チェーン店や大型ゲームセンターなど、遊ぶ場所はいくらでもあった。

父さんの転勤で東北に来た。

父さんも母さんも空気がきれいですごし易いとか言うけれど、小手指だつて別に空気が汚い感じはないし、電車で東京まで近いのは今考えると大変在り難かつた気もする。

ただ、車の往来が圧倒的に少ないから、通学路の安全はかなり確保されているかもしれない。

そのくせ自転車に乗るときはヘルメットを着用するように学校側から指導されている。

そんなのカッコ悪くてダサダサだ。

あんなペラペラの白いヘルメットが、自動車とぶつかった時に役に立つのだろうかと思うと、カッコ悪さと引き換えにしようとは思わない。

だから僕は、新宿のショップで買ってもらったATBに乗るときも、ヘルメットなんてかぶらない。

少し遅い時間、一階の廊下を歩いているとリビングから両親の話し声が聞こえた。

「仕方ないさ」

「まだこれからだったのに…… 可愛いそうよ」

「暮らし易い土地だと思ったのだけれど……」

両親の声は哀しそうだった。

僕は誰かの不幸を想像した。

もしかしたら、お隣の家の事でも話しているのだろうか。

リビングから零れるのは低い声で、会話の全ては聞こえなかった。暗がりの廊下から階段を上がって、僕は自分の部屋へ帰る。

少し前から一階には、なんだか嫌な臭いがして僕はほとんど一階には留まらない。

何処からその臭いがするのか、なんとなく判っているから寄り付かない。とにかく僕は自分の部屋が一番落ち着くんだ。

朝、鳥の囀りで目が覚めた。やたら間近で聞こえる鳥の鳴き声は、窓の直ぐ外——ベランダの下からだ。

ツバメの巣で卵が孵ったのだろう。

ヒナのけたたましいような鳴き声と、それに応えるような親鳥の声。

窓の外を見ると、ツバメが飛び交っている。

住宅地の空き地には草も生い茂って、餌には困らないだろう。

僕は隣の窓を眺める。

誰もいない。

彼女の部屋のガラス窓には、僕の家と僕が覗く窓だけが映り込んでいる。

時折ツバメがひゅうつと風を切るように横切ってゆく。

朝の陽がなんだか眩しくて、僕は窓だけを少し開けて顔を引っ込める。

陽射しが注ぎ込む部屋の中も、朝のすこしひんやりとした空気に包まれて、ツバメの囀りだけが響き渡る。

「今日、窓が開いていたのよ」

「昨日、閉め忘れたんだろ」

「そうかしら……」

夜、リビングから両親の声が聞こえてきた。

僕は何だか一階にいるのが嫌で、直ぐに二階へ戻ったから何の話か判らなかった。

夜中に窓の外を見る。

彼女の部屋の窓辺は、当たり前のように沈黙している。

まるで誰もいないようだけれど、以前一度だけ一階の隅の部屋の電気が点いたのを見た事が在る。

彼女は身体が悪いから、夜は早く寝てしまうのかもしれない。

翌日も彼女とは逢えなかった。

夜、フラフラと廊下を歩いていたら、リビングから両親の話し声が聞こえた。

「一家心中でだって」

「どつりでな……なんか佇まいが違ってから」

「もう二年近く経つらしいわ」

「家はどうするんだ？ 取り壊さないのか？」

「それがね、時々窓に、女の子の姿が見えるそうよ」

「なんだ、それ？」

なんだか尋常ではない話題だ……どうやら隣の家の事を話しているようだ。

隣でいったい何が起きたというのだろう。

「田辺さんが、そういうの見えるんだって。他にも見た人はいるって」

「道路を挟んでいてよかったな」

「夕方になると、時々二階の窓辺で読書をしてるんだって」

「そりゃ、壊すに壊せないな……知っていたら、他の土地を買った

のに」

窓辺で読書？ 彼女の事だろうか？

隣の一家は、二年前に一家心中したのか？ 彼女は、一家心中した家の娘？

じゃあ、僕が時折笑顔を交わすあの彼女は……そう言うことなのだろうか……。

やっぱり彼女は不幸なのだ。

【参話】了

翌日は何だか家の中が慌しかった。

家の中とは、僕の家の中。

そして朝からあの嫌な臭いが家中に立ち込めていた。

僕は何だか落ち着かなくて、学校に行くのを止めた。

最近は学校にいても全然面白くない。

みんなが僕を無視して、先生までもが僕を存在しないかのように扱う。

田舎の学校の方が、イジメが悪質なのだろうか。そして、ちょっとり都会から転校してきた僕は、ついにその標的になってしまったのだろうか？

僕は家から出る気がなくて、夕暮れまでずっと部屋にいた。

一階からは、普段には無い慌しさと静けさが交互に混ざり合って、ねじれたような音を立てていた。

影が長く伸びるその時間、東側の窓を覗くと、彼女がいた。

僕に気付くと、またあの笑顔。

どこか愁いで、でも朗らか。

僕をじっと見つめている彼女は、ほんとうに死んでいるのだろうか？

肩に着く黒髪が少し揺れていた。

瞬きをする。

僕に何か言いたげで、その眼差しに吸い込まれそうだ。

僕はただ彼女の少し潤んだような黒い瞳を見つめ返していた。

不思議と恐怖は無い。だって、もう暫く前から会っている娘だ。

一階の喧騒は完全に消えて、何時もの静けさの中にただ、外を飛び交うツバメの声だけが響いている。

彼女はふと、通り過ぎるツバメを視線で追った。

僕も思わず視線でそれを追う。

その先に見えた黒服の集団は、ゆつくりとした足取りで住宅の陰に消えていった。

彼女は再び僕を見つめると、今度は笑っていなかった。

ゆつくりと瞬きする。

陽射しは弱まり、部屋の中に暗がりが出る。

一階からは相変わらず嫌な臭いが漂っている。

彼女が僕の家玄関を見下ろしていた。

僕は何故彼女が僕の家玄関を見つめているのか不思議に思った。そう言えば、さつきから頻繁に玄関ドアが開閉する音が聞こえている。

僕は彼女の視線を辿るようにベランダへ出て玄関を覗き込む。外はまだ、思いの外明るかった。

夕陽が沈みかけてはいたけれど、緋色の蒼穹^{そら}にはまだ星は見えない。

母親の姿がチラリと見える。

黒いスーツを着た男のひと、黒いワンピースを着た女のひとが出て来た。

西側のお隣の伊勢崎さん夫婦だ。

「今日は有難う御座います」

「元気出してね。何でも相談して」

話好きのあのおばさんが、少なめに言葉を交わして庭を出て行く。その後、この前のだれだかわからないおばさんが出て来た。

おそらく、あの人が田辺さんだろうと僕は思った。

「じゃあ、また」

田辺さんは庭先でこちらを見上げた。

辺りはほの暗くなってきた。

ほの暗い中に佇む田辺さんは、また、少し哀しそうな笑みを僕に向ける。玄関の明かりに、白い真珠のネックレスが静かに光を放っている。

今日は誰かの命日だっただろうか……。
婆ちゃんが亡くなったのは冬だし、爺ちゃんは僕が生まれて直ぐの頃に他界している。

それに、さっきの集団の中に、佐々木先生がいたような気もする。僕は何だか心細くなつて東側の窓を再び覗く。隣の家の窓に、もう彼女の姿は無かった。

夜、一階の全てを、あの嫌な臭いが満たしている。

僕は電気も点けずに廊下を歩いていった。

リビングはひっそりと静まり返つて、誰の気配もしない。

キッチンの食卓に僕の分の夕食は無かった。

僕は家族の気配を探つて、再び歩く。

和室から両親の微かな声が聞こえた。

「もう四十九日だから、ご飯の用意もやめよう」

「そうね……そうするわ。でも、部屋はずっとあのままがいいわ」

「ああ、そうしよう」

客間の和室から零れ出る悪臭。

僕はずっとここへ入る事を拒んできた。

それでも急に人恋しくて、僕は両親の顔が見たくなった。

息を停める思いで、僕は和室の戸を開け中に入った。咽るように

立ち込める、焼香の香氣におい

両親は並んで正座し、一方方向を見つめて沈黙している。

黒光りする観音開きのわりと大きな置物。

仏壇だ……嫌な臭いはここから放たれていた。立ち込める線香の煙るその場所は、僕が来てはいけないのだ。

両端に立てられた白い口ウソクの上で、オレンジ色の大きな炎が揺らいでいる。

仏壇に立ててある小さなカラー写真は……宮本一敏。
僕だ。

僕は軽い頭痛にみまわれて、自分の消えかけた記憶を辿る。

思い起こせばそうなのだ。

ここへ越して来て間もない頃、僕は自転車に乗っていて、車に撥ね飛ばされたんだ。

隣の窓辺で彼女に逢ったのは、僕がこっちの世界に來た日だったのか。

彼女に初めて逢ったのは、四十九日前だっけ。

そうか……今日は、僕の四十九日なんだ。

明日も、窓辺で彼女に逢えるだろうか。

――了――

【参話】了（後書き）

お読み頂き有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8741h/>

窓辺

2010年10月8日15時57分発行